

2020年4月3日

## 苦悩を知る悲しみの人

先週の日曜日は満開を迎えた桜の花に珍しく雪が積もりました。雪化粧した桜の枝は、パンデミックという災害に耐え、それでも新しい季節を乗り越えていこうとするわたしたちの思いが重なっているかのように見えました。

今日のマタイ福音書では、ピラトの裁判と群衆のやりとり、十字架上的死に至るご受難の場面が描かれています。イスカリオテのユダによる裏切り、弟子たちとの最後の晩餐、弟子の頭であるペトロの否認を経て、十字架の道をゆくイエスさまの姿は、人間の苦しみとは単に身体的なものにとどまらず、魂の苦悩、精神的な苦悩というものがあることに改めて気付かされます。たとえば、仲間とのつながりを絶たれることや親しい人の裏切り、群衆や周囲の人々の無理解によって苦しみが深くなっていることが分かります。人はだれも独りきりで生きていくことはできないのです（cf. 創世記2・18）。

人は自分が受けた苦しみや悲しみを何らかの形で表現し、誰かに聞き届けてもらう必要があるのかもしれませんが。その誰かに聞き届けてもらう方法の1つは祈りです。十字架上のイエスさまの言葉や今日の答唱詩編には、心の嘆きや葛藤が祈りとしてささげられています。

「神よ、わたしから遠く離れず  
急いで助けに来てください」（詩編22）

「わが神、わが神、  
なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ27・46）

わたしたちが祈りをささげるときには、神さまに対して美しいことや正しいこと、感謝と賛美だけをささげなくてはならないと固く考えてしまうことがあるかもしれませんが。しかし、十字架上で苦しみを受けられたイエスさまは、わたしたちの嘆き、やり場がない怒り、苦悩すら立派な祈りであり、天の御父はこれを受け止めてくださる、ということに気付くよう招いておられます。

さて、教会は枝の主日を迎えましたが、今年はオリーブの枝を手にとって教会に集い、聖水の祝福を受けることができません。カテドラルでは菊地大司教さま

のミサが配信される予定ですので (<https://tokyo.catholic.jp/info/diocese/37890/>) これを視聴し、マタイ福音書の受難朗読 (27・11－54) を各家庭で読み、十字架を見上げて静かに黙想する時間を取りたいものです。

立川教会では枝を準備する予定ですが、いつ安全に皆さんにお渡しすることができるか分かりません。この日曜日には庭や近くを散歩された際など、どのような枝でもかまいませんので各自で準備され、ご自宅の十字架に飾られることをお勧めいたします。十字架のイエスさまは朝ごとに「疲れた人を励ますように、言葉を呼び覚まし」(イザヤ50・4) キリスト者としてのわたしたちの歩みを力強く支えてくださいます。

いよいよ聖週間です。

わたしたちの心の中に、いつも子ろばに乗って来られる柔和なイエスさまの姿を呼び覚ますことができますように。

カトリック立川教会 主任司祭

東京教区 ヨゼフ 門間 直輝